

授業科目「メディア・リテラシー」における教育学部生の作品制作と評価との関係

著者	深谷 和義
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 社会科学篇
号	48
ページ	151-159
発行年	2017-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00002298/

授業科目「メディア・リテラシー」における 教育学部生の作品制作と評価との関係

深 谷 和 義*

Relation between Students' Work Production and Evaluation of School of Education
in the Class "Media Literacy"

Kazuyoshi FUKAYA

あらまし

大学教育学部でのメディア・リテラシーの授業において、受講学生が制作した作品の発表を他の受講学生に相互評価させた。その結果、授業担当教員の評価と受講学生の相互評価とは強い相関があることが分かった。一方で、受講学生の作品制作の得意不得意と他の受講学生作品に対する評価の適切さとは関係ないことが分かった。つまり、メディア・リテラシーでの作品制作が不得意であった場合にも、将来の教員としての評価する力には影響がないことが示唆された。また、相互評価に用いた5項目では、デザインが最も全体の評価に及ぼす影響が大きいことなどが分かった。

キーワード：相互評価、評価項目、メディア・リテラシー、大学教育、教育学部

1 はじめに

近年、大学の授業においてもアクティブラーニング等の能動型な学修が注目されている。アクティブラーニングは、文部科学省中央教育審議会が2012年に答申した「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—」において、「個々の受講学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、受講学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。」ことから必要とされている¹⁾。アクティブラーニングには様々な形態があるが、受講者が作品制作したり、他の受講者に対して発表したり

* 教育学部 子ども発達学科

する活動もその範疇である。

制作や発表等の活動に対して、受講者が相互に評価するいわゆる相互評価が行われることがある²⁾。橋本によると、相互評価は、「自分のもつフレームや思い込みを打ち破り、自己認識の発達を促す」ことから注目されている³⁾。

高等教育において教育評価を扱った先行研究はいくつかある。例えば、木村はプレゼンテーション演習において、自己評価と他者からの相互評価とを比較することで、成績が高いと自己評価が低く、逆に成績が低いと自己評価が高いことを示している⁴⁾。後藤はフィードバックを行うことで、教師の評価と学生による評価とが高い相関を示すことを明らかにしている⁵⁾。鈴木・向後は大学院でのオンライン授業において、TA（ティーチングアシスタント、Teaching Assistant）による採点結果と学生の相互評価結果とを比較している⁶⁾。これらはいずれも教員等の評価や自己評価と比較することで、学生の相互評価との関係性を明らかにしている。

教育学部生に対する相互評価を対象とした研究には次のものがある。堀内は文献7)で、家庭科指導法における模擬授業において評価や感想を簡潔にコメントさせた相互評価が自己を客観視して授業内容を省察するための手掛かりとなったとしている。森下らは文献8)で、特別活動指導法において学級通信づくりをさせ、相互評価及び自己評価によってどのような学びを得たかを明らかにしている。これらの研究は、あくまで教育学部生における自己の学びのための相互評価であり、将来の教員として適切な評価ができることを意図してはいない。

大学の中でも、特に、教員養成学部を受講学生は、将来教員になった場合に児童生徒に対する評価をすることになり、人の作品を適切に評価できることが必要である。しかし、教育学部を受講学生で特に小学校教員希望の場合、ほとんどの教科を担当するため、自分自身が得意とは言えない分野でも教える必要がある。その場合にも、将来教員になったときには、児童の作品を適切に評価しなくてはならない。

以上を踏まえて、本論文では、大学の教育学部生において、自身の作品制作の得意不得意が他の受講学生作品への評価に及ぼす影響を調査により明らかにする。特に、教育学部生として、小学校教員免許取得予定者を対象とする。

以下では、2章で筆者が行っているメディア・リテラシー授業を概説する。次に、3章では、本論文における調査方法を述べる。また、4章で結果と考察を示し、最後に、5章で本論文の結びと今後の課題を述べる。

2 メディア・リテラシー授業

本論文では、大学において、受講学生が制作した作品に対する発表の相互評価を実際に行っている授業を扱う。授業科目はA大学教育学部における「メディア・リテラシー」とする。対象学年を2年生以上とした専門科目である。

メディア・リテラシーの授業では、受信したメディアを評価するだけでなく、発信することが重要視されている⁹⁾。しかし、パソコンを使った作品制作は、パソコン操作があまりできなかったり、また、デザイン面で不得意だったりして、制作そのものが苦手な受講学生もいる。

本論文では、2015年度に実施されたメディア・リテラシーの授業における作品制作発表に関する相互評価のデータを扱う。この科目は2012年度から筆者が担当している。受講学生が制作する作品は、次に示す3種類である。これらの3種類を選んだのは、文献10)のように、新聞、パンフレット、ニュース番組づくりが学校教育におけるメディア・リテラシーに例示されていることが多いからである。

- ・新聞（Wordを用いた新聞）
- ・ポスター（PowerPointを用いたポスター）
- ・ビデオ（ムービーメーカーを用いたビデオ）

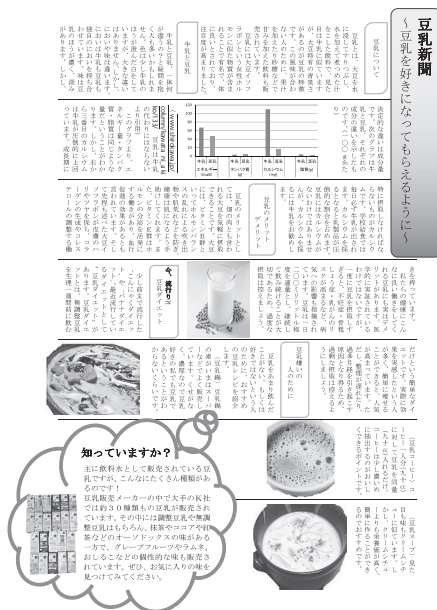
それぞれの作品において、制作テーマは受講学生に自由に決めさせている。ただし、前年度までの受講学生の作品を複数見せることでテーマ決定の参考とさせている。見せる作品を選ぶ際には、できるだけ教育的な内容を含んでいる作品が多くなるようにしている。例えば、新聞では学級新聞等を見せ、ビデオでは授業における理科の実験等の教材を中心に見せている。なお、新聞では、サイズをB4一枚としており、ポスターでは、A4一枚としている。ビデオでは、特に時間を設定せずに、受講学生自身の考える長さのビデオとしている。

本論文で扱うメディア・リテラシー授業における2015年度の全15回のシラバスは次のとおりである。

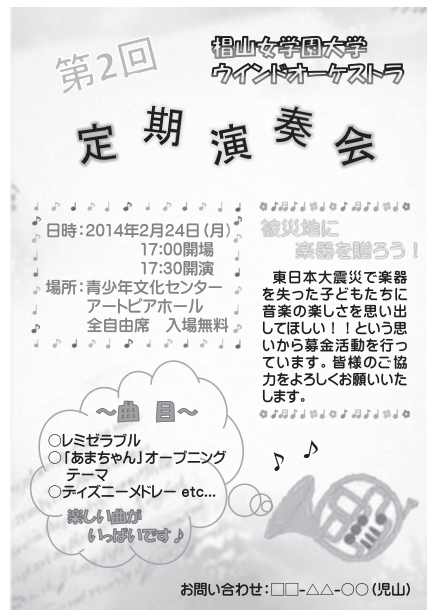
1. メディア・リテラシーとは
2. Wordを使ったDTP
3. メディアと社会(1) 新聞
4. 作品制作（新聞）
5. 作品制作（新聞）完成
6. 作品発表（新聞）
7. PowerPointを使ったポスター
8. メディアと社会(2) ポスター、作品制作（ポスター）
9. 作品制作（ポスター）完成
10. 作品発表（ポスター）
11. Windowsムービーメーカーを使ったビデオ
12. メディアと社会(3) ビデオ
13. 作品制作（ビデオ）
14. 作品制作（ビデオ）完成
15. 作品発表（ビデオ）

1回目の授業で、メディア・リテラシーの概要を説明した後、2～6回目で新聞、7～10回目でポスター、11～15回目でビデオをそれぞれ扱う。新聞、ポスター、ビデオでは、それぞれの初回でWord、PowerPoint、ムービーメーカーの使い方、次の回では受信したメディアの評価について、その次の2回で作品制作し、最後の1回で作品発表を実施させ

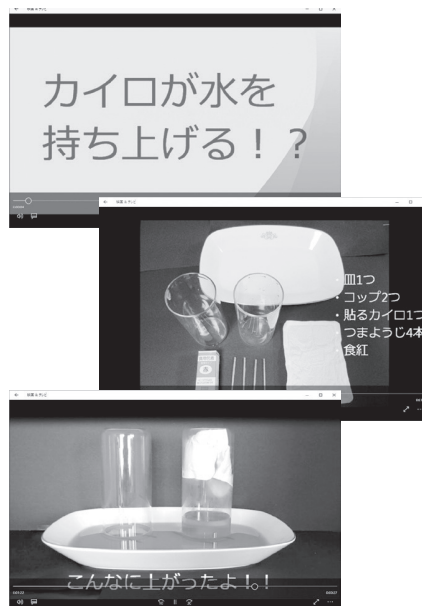
ている。ただし、ポスターにおいては、1回少ない回数で実施している。過去の受講学生の新聞、ポスター、ビデオの作品例を図1のそれぞれ(a), (b), (c)に示す。



(a) 新聞



(b) ポスター



(c) ビデオ

図1 受講学生の作品例

3 調査方法

2015年度におけるメディア・リテラシー授業の受講学生は42名であった。全員が学部生であり、学年の内訳は、2年生が15名、3年生が25名、4年生が2名であった。3種類の作品は、2章で示したように各2回程度の授業で制作している。ただし、授業時間外での制作を各自の判断で行っていることがある。それぞれ90分間の授業1回を使って全員が発表した。時間は一人おおよそ2分ずつである。発表では、自分の作品をパソコンで起動し、全員に見せながら行った。

受講学生は発表を聞きながら、自分以外の発表者全員に対して相互評価した。相互評価は表1に示す「テーマ設定」「構成」「デザイン」「技術」「発表」の5項目に対して行った。これらの評価項目は、文献4)、11)等を参考に筆者が定めた。評価は、表1の右列に示した観点を指示し、それぞれ5点満点で、高い方から5、4、3、2、1の5段階とした。したがって、合計25点満点で評価している。また、可能な範囲で、個々の作品・発表に対するコメントを書かせている。評価を2分程度の発表時間内に行う必要があるため、細かな評価基準を示していない。これらの評価を、発表者の氏名や評価の記入欄を教員が事前に印刷した用紙に筆記用具で書き込ませた。ただし、相互評価ができるだけ幅広い点数となるように注意している。これは、「お互い様効果¹²⁾」によって、むやみに全員を高く評価することで、公平な評価とならないことを少しでも避けるためである。受講学生へは自分に対する他の受講学生の評価結果が、次の授業時にフィードバックされるようにした。フィードバックは、前述の評価・コメントの記入済み用紙をコピーして作品制作受講学生本人に渡すことで実現している。

表1 作品評価項目とそれぞれの観点

項目	観点
テーマ設定	テーマの意図がきちんと伝わる作品になっているか。
構成	テーマに即した内容で構成されているか。
デザイン	テーマに即したデザインで見やすい作品になっているか。
技術	Word, PowerPoint, ムービーメーカーの機能を上手に使った作品になっているか。
発表	上記の内容が伝わりやすい発表になっていたか。

本論文においては、以下で、受講学生の各作品が他の受講学生から評価された結果を「相互評価値」とする。相互評価値は、受講学生の作品に対する評価を評価した受講学生全体で平均した値とする。相互評価値は、5項目それぞれと5項目の合計で求めている。

また、個々の受講学生において、他の受講学生の各作品に対する評価が適切か否かを判断するために、「評価誤り値」を次のように求めた。まず、全受講学生の相互評価値の平均値と個々の受講学生が評価した値の平均値との差を個々の受講学生が評価した値に加えることで、すべての受講学生が評価した値が同じ平均値になるように調整した。これを「正規化評価値」とする。さらに、一人一人の受講者に対する正規化評価値とその受講者への相互評価値とで、差の絶対値を累積した値を評価した受講学生の評価誤り値とした。

評価誤り値は、5 項目の合計に対して作品ごとで求めている。

さらに、授業担当者である筆者が42名の発表者全員に対して、相互評価と同様の観点で25点満点の評価を行った。教員が各受講学生の作品に対して評価した結果を「教員評価値」とする。

4 調査結果と考察

4.1 教員評価値と受講学生による相互評価値の関係

3 種類の作品をすべて作成し、かつ発表した受講学生は39名であった。以下では、この39名に対する評価結果を扱う。学年の内訳は、2 年生が13名、3 年生が24名、4 年生が2名であった。

まず、教員評価値と受講学生の相互評価値との関係を図2に示す。図2では、(a)が新聞、(b)がポスター、(c)がビデオの結果である。いずれも受講学生の相互評価では、教員の評価ほど差がついていない。これらの相関係数は、順に0.79, 0.45, 0.53であった。新聞では強い相関があり、ポスターとビデオではやや相関があった。また、(d)は、3 種類の作品における教員評価値、相互評価値それぞれの平均結果を示している。受講学生は教員ほど差をつけていないものの、相関係数は0.78と強い相関であった。これらの結果から、文献5), 6) で示された結果と同様で、受講学生が全体的に適切に評価できていると言える。

4.2 評価の5 項目における学生の相互評価値の特徴

3 種類の作品それぞれに対して、5 項目ごとで受講学生の相互評価値の標準偏差を表2に示す。同様に、5 項目ごとでの相互評価値と全体の相互評価値との相関係数を表3に示す。

表2, 表3より、5 項目が全体の相互評価値に及ぼす影響を中心に考察する。まず、「デザイン」はビデオの標準偏差を除いて5 項目中で標準偏差も相互評価値との相関係数も一番大きい数値を示している。これは、「デザイン」が評価の個人差が最も大きいことと相互評価値への影響が大きいことを意味する。次に、「技術」は標準偏差が1, 2 番目に大きく、相互評価値との相関係数が2, 3 番目に大きい。これは、「技術」がデザインに次いで評価の個人差が大きいことを意味する。さらに、「構成」は相互評価値との相関係数が2, 3 番目に大きい。これは、「構成」がデザインに次いで相互評価値への影響が大きいことを意味する。一方、「発表」は相互評価値との相関係数が1, 2 番目に小さな数値となっている。これは、他の項目が作品の内容に関する評価であるのに対して、「発表」は説明の内容や話し方に関する評価のためだと考えられる。最後に、「テーマ」は標準偏差が5 項目中ですべて一番小さな数値であり、相互評価値との相関係数も1, 2 番目に小さな数値を示している。これは、「テーマ」による評価の差がさほどないことを意味する。

4.3 受講学生による相互評価値と評価誤り値の関係

次に、受講学生の相互評価値と評価誤り値との関係を図3に示す。図3では、(a)が新聞、(b)がポスター、(c)がビデオの結果である。いずれも相互評価値に関わらず評価誤り値が散らばっていることが分かる。これらの相関係数は、順に-0.02, -0.01, 0.24であった。

授業科目「メディア・リテラシー」における教育学部生の作品制作と評価との関係

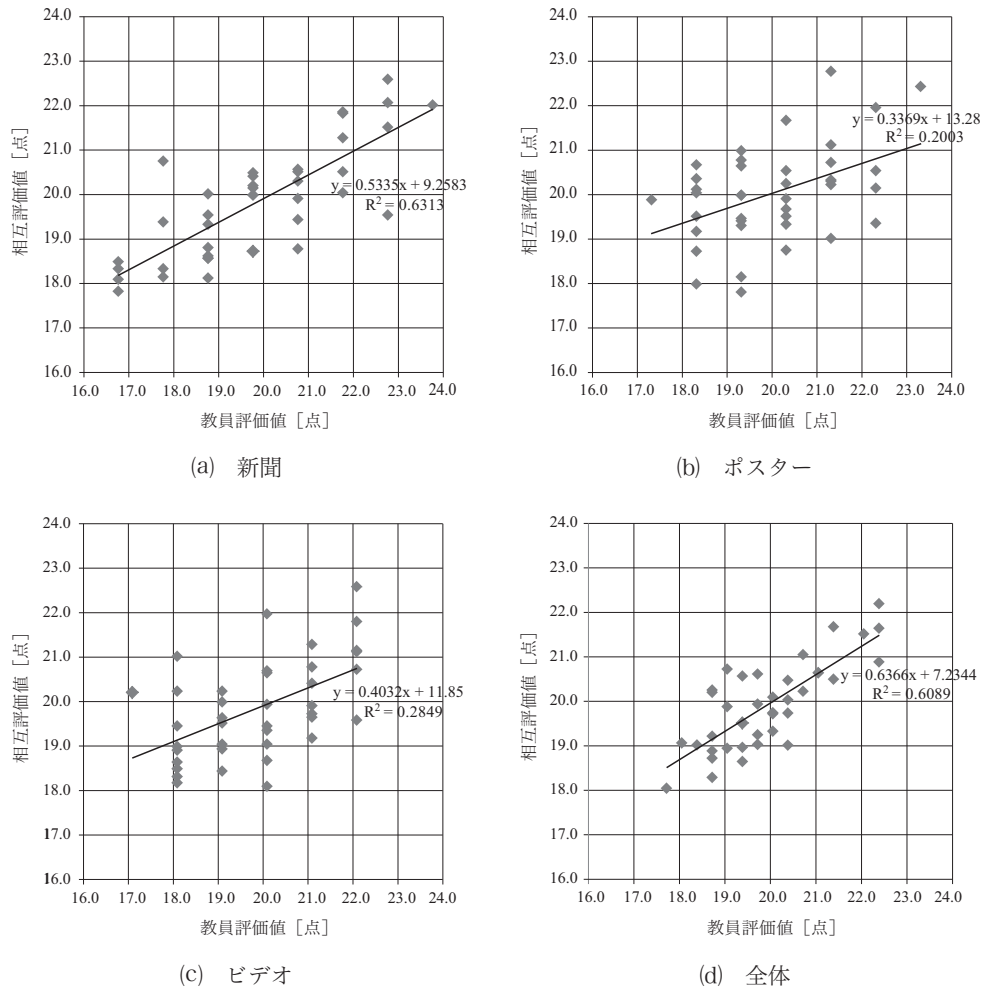


図2 教員評価値と受講学生による相互評価値の関係

表2 5項目ごとでの相互評価値の標準偏差

作品	テーマ設定	構成	デザイン	技術	発表
新聞	0.14	0.22	0.43	0.41	0.26
ポスター	0.13	0.18	0.38	0.35	0.26
ビデオ	0.17	0.25	0.29	0.39	0.19

表3 5項目ごとでの相互評価値と全体の相互評価値との相関係数

作品	テーマ設定	構成	デザイン	技術	発表
新聞	0.78	0.87	0.94	0.89	0.70
ポスター	0.69	0.88	0.90	0.85	0.70
ビデオ	0.76	0.93	0.93	0.90	0.62

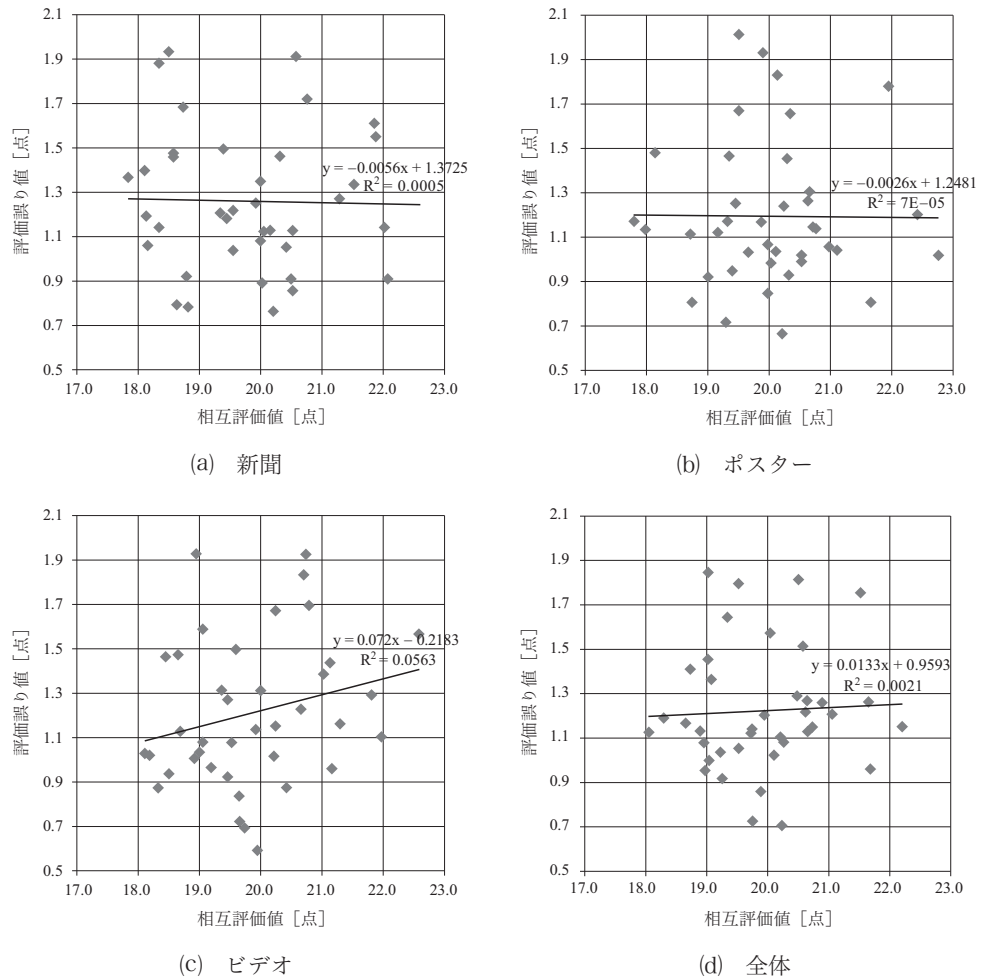


図3 受講学生による相互評価値と評価誤り値の関係

新聞とポスターではほとんど相関がなく、ビデオでは弱い相関があった。また、(d)は、3種類の作品評価の平均結果を示している。相関係数は0.05でありほとんど相関がなかった。受講学生自身が制作した作品の評価が高いか低いかは、他の受講学生作品を適切に評価できるか否かとはほとんど相関がないことになる。つまり、作品制作が不得意であった場合にも、教員としての評価する力には影響がないことが示唆された。

5 ま と め

大学教育学部でのメディア・リテラシーの授業において、受講学生が制作した作品の発表を他の受講学生に相互評価させた。その結果、教員の評価と受講学生の相互評価とは強い相関があることが分かった。一方で、作品制作の出来具合は、他の受講学生作品に対

する適切な評価とはほとんど相関がないことが分かった。これらのことから、メディア・リテラシーでの作品制作が不得意であった場合にも、教員としての評価する力には影響がないことが示唆された。また、5項目示した評価の観点においては、デザインが全体の評価に及ぼす影響が大きく、逆に、テーマについては、評価の違いが少なかった。発表については、他の観点とは異なる傾向を示すことが分かった。

他の年度のデータを含めた継続的な評価を用いて、より詳細に傾向を分析するのが今後の課題である。

付記

本論文の一部は、日本教育工学会第32回全国大会（2016年9月17日、大阪市）で発表した¹³⁾。

参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会：“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）”，<http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm>（参照日 2016.9.1）
- 2) 藤原康宏，大西仁，加藤浩：“学習者間の相互評価に関する研究の動向と課題”，メディア教育研究，vol. 4, no. 1, pp. 77-85（2007）
- 3) 橋本重治：“2003年改訂版教育評価法概説”，図書文化社，p. 92（2003）
- 4) 木村富美子：“学生の相互評価における自己評価と他者評価に関する分析—プレゼンテーション演習における試み—”，創価大学通信教育部論集，vol. 9, pp. 157-172（2006）
- 5) 後藤善友：“受講学生による記述課題の相互評価と教師評価との相関”，別府大学短期大学部紀要，vol. 28, pp. 67-70（2009）
- 6) 鈴木伸子，向後千春：“大学院でのオンライン授業における相互評価の信頼性と妥当性の検討”，日本教育工学会研究報告集，vol. 2016, no. 2, pp. 47-50（2016）
- 7) 堀内かおる：“家庭科教員養成における模擬授業の有効性—コメント・レポートによる相互評価に着目して—”，日本家庭科教育学会誌，vol. 51, no. 3, pp. 169-179（2008）
- 8) 森下孟，伏木久始，谷塚光典，東原義訓：“特別活動指導法における教員養成学部生の学級通信づくりの相互評価分析”，日本教育工学会研究報告集，vol. 2016, no. 1, pp. 47-50（2016）
- 9) 近藤尚：“東海3県の大学におけるメディア・リテラシー授業の実態分析”，教育メディア研究，vol. 19, no. 1, pp. 13-23（2012）
- 10) 井口磯夫：“学習情報研究2014年5月号”，公益財団法人学習ソフトウェア情報研究センター，vol. 238, pp. 4-31（2014）
- 11) 河野稔：“プレゼンテーション制作を通じた情報倫理教育における協調学習の有効性”，第40回教育システム情報学会全国大会，pp. 177-178（2015）
- 12) 藤原康宏，大西仁，加藤浩：“公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価—学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」—”，日本教育工学会論文誌，vol. 31, no. 2, pp. 125-134（2007）
- 13) 深谷和義：“教育学部生のメディア・リテラシー作品発表における相互評価の分析”，日本教育工学会第32回全国大会，pp. 151-152（2016）